

◆旧佐伯海軍航空隊掩体壕、国の登録有形文化財に内定

佐伯市東浜の興人佐伯工場（石毛邦雄工場長）の敷地内に残る旧佐伯海軍航空隊の掩体壕は太平洋戦争中の昭和十八年（一九四三）、航空隊の飛行場（現興人佐伯工場）内に建設された。幅二四メートル、奥行一三メートル、高さ五メートルのコンクリート製で、戦闘機を爆撃から守るため壕内に退避させていた。

今も保存状態は良く、今年三月に国の文化審議会で登録有形文化財にす
るよう答申された。
国の登録有形文化財は県内に六八件（内定含む）があるが、戦争関連施設の登録は県内で旧佐伯海軍航空隊掩体壕が初めて。



興人佐伯工場が整備した掩体壕

工場は壕内にあつた資料を取り除き、砂利を敷き詰めた。また、現在は掩体壕の見学者も工場の入り口を通るため、受け付け簿への記入が必要だが、見学者の出入り自由な専用入り口を新たに設ける予定。工場内に残っている同航空隊の戦闘指揮所も整備し、保存する方向で検討しているという。

昭和十九年末から二十年にかけて同航空隊にいたことがある赤松勇二さん（八一）は「佐伯市向島」は「掩体壕の整備は大変ありがたいこと。市内にはまだ多くの戦争遺跡が昔のまま残っている。ほかの遺跡の保存活動も進んでほしい」と喜んでた。

興人佐伯工場総務課では、「地元の人々が熱心に戦争遺跡の保存活動に取り組んでおり、会社としてもできることは協力したい」と話している（『大分合同新聞』平成十三年六月三十日版）。

◆今秋「里帰り展」予定

弥生町上小倉横穴墓の出土品

弥生町上小倉の横穴墓は、上小倉の雨龍山山麓に点在

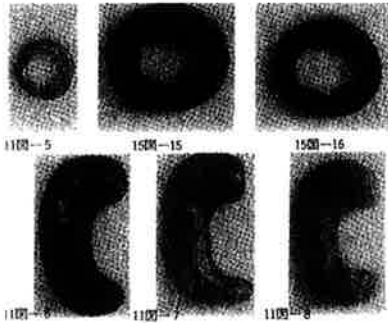
し、この下方に佐伯氏ゆかりの磨崖石塔群があることから、この辺りに強力な支配者が存在したと、文化の中心地であったと想像されています。

平成二年(一九九〇)から三か年でこの丘陵地域の急傾斜地崩壊対策事業の施工による調査が行われ、四年度に横穴墓から出土品(埋蔵文化財)が発見されました。

この発掘では、勾玉・管玉・水晶玉・耳環・土師器・須恵器等が発見され、発掘中は、町内小学校や地区史談会などの見学もあり、郷土を知る体験学習の機会となりました。

そして、この出土品はその後、県文化課文化財資料室で保管されてきましたが、この程、法律の改正により弥生町へ譲渡されたものです。

町では、この機会に弥生の歴史を学び、郷土への愛着心を育



横穴出土遺物

むため、県文化課及び町文化財調査委員等の協力により、出土品ごとの説明方法を検討し、今秋中に弥生町民会館ロビーにて「里帰り展」と題して公開展示を行う計画です。『広報やよい』平成十三年六月号)。

◆「佐伯新聞」佐伯市に寄贈

—大正から戦前までの貴重な資料—

大正から昭和にかけて、佐伯市で発刊されていた佐伯新聞(佐伯自治新聞)を三月、発行者の家族が市に寄贈した。市では、当時の佐伯地域の様子を知る貴重な資料として、マイクロフィルムなどに保存。市平和祈念館「やわらぎ」でも市民に公開する予定。

寄贈したのは発行者の一人だった阿南卓さん(元佐伯市長)の娘婿・顕さん(七二)市内城下西町II。

佐伯自治新聞は大正二(一九一三)年刊の週間新聞。大正五年「佐伯新聞」に改称後、政府の言論統制を受けて廃刊した昭和十四年までに計千三百三十七回発行した。大きさはA3判ほどで、平均八ページ。

当時、政党の影響を色濃く受けた新聞が多い中、佐伯

自治新聞は「万人の新聞」を理想とし、不偏不党を信条とした。発行部数は不明だが、当時の佐伯町議会議員選挙の様子や方言集、出征した兵士の話など、県南地域の政治・経済から身近な話題まで取り上げている。四コマ漫画や子ども向けの「おとぎ新聞」などのコーナーも設けていた。

阿南さんは「発行者だった義父は公正で、信念を曲げない人でした。時代の流れ、当時の佐伯の様子を知る参考にしてほしい」と話している（『大分合同新聞』平成十



佐伯自治新聞(佐伯史談会蔵)

三年八月四日版)。

◆木浦鉦山のスズ製錬調査経過を報告

宇目町の木浦鉦山でスズの製錬遺跡などの調査をしている国際資源大学校(秋田県)の植田晃一さんが三日、同町役場でこれまでの調査の報告を兼ねた講演会を開いた。

町職員・町議・町文化財調査委員の約四十人が参加。植田さんは日本のスズ鉦山の歴史などを説明し、木浦鉦山について「規模からみれば、長期にわたってスズを製錬していたと思われる。木浦鉦山は素晴らしい鉦山であるとの認識を」と話した。

植田さんは昨年四月、今年一、四月の計三回、同鉦山を調査。二度目の調査では、石うすやいろり跡を発見しスズ製錬が江戸時代に行われていたことを確認している（『大分合同新聞』平成十三年八月九日）。